

平井知事基調講演「環境への鳥取県の取組」

(第4回とっとり環境ネットワーク全体会)

日時：平成22年2月6日(土)午後3時

場所：ホテルセントパレス倉吉(倉吉市上井町)

皆さまこんにちは。本日は環境ネットワークの大会がこのように本当に熱気あふれる中で開催されておられます事に心からお祝い申し上げたいと思います。

5つのそれぞれの分野におきまして、例えばCO₂の削減でありますとか、あるいは景観の保全でありますとか、環境教育でありますとか様々な分野にお取り組みを頂いております。皆さまのお陰でいよいよ、鳥取県も環境に向かって動き出したかなと思います。先程は私も入ってきますと、福田さんのずっととうとうとですね、ビデオが流れておりましたいや〜たいしたものだな、と思いました。私はそこまでちょっと技術がございませんので、静止画像でございますけれども、もうひとつ御勘弁の程を頂きたいと思う次第でございます。これからですね、おそらく世の中はどんどん変わってくると思うんですね。その中で鳥取というのは意外といいポジションにいるのかもしれないなと思います。

それは自然の環境もそうでありますし、それから町の美しさだとか、古くから受け継がれたものがしっかりと形でお生きている、そんな事もあると思います。

それから、環境を守っていきこう、きれいにしていこう、大切にしていこう、という事になりますと、これは人の力がとっても大切なのです。

ほっとくだけではいいようになるわけがありません。ですから、手を加えていかなければならない。ボランティアの皆さんですとか、いろいろな企業な方とか、地域の団体とかそれぞれが力を合わせてやっていかないと進まない。守れないという事になります。

私たちはですね、そういう意味ではいいポジションにあるのかなと思うのです。

例えば、鳥取県はボランティアの参加率でいいますと、34.4%でありまして全国でトップなんですね。それぐらいいろんな活動に昔から関わっている、総事などと言われる事がありますけれども、そういう事で地域の活動に関わったり致しまして、どんどんとですね、環境活動に花開いてきているという状況でないかと思えます。

先般横浜の方に行きまして、NPO関係者の方に向かって三重県の野呂知事と一緒に話をさせていただく機会がありました。やっぱり皆さん驚かれるのは、鳥取におけるいろんな環境活動が、多くのボランティアの手に支えられているという事だと思えます。

例えば砂丘をとってみますと、この砂丘もどういう状態だったか。バブルが終わった平成2年3年というのは、ものすごく草原化が広がったわけです。これは戦後ですね砂丘についての政策が変わってきた事もあります。それまでとは違いまして、砂丘に植林をしてそして、農業利用だとかですね、飛砂防止を図っていきこうとこういう事に切り替わっていったわけがあります。ですから、森林の植林だとか県の植林だとかいろんな事がございまして、どんどんと木が植えられていった。そうすると何が起こったかといいますと、ちょうど約5メートル

の風速5メートル吹きますとそれで初めて風紋が出来るわけでありまして、5メートルの風で砂がふわっと飛んでそしてまた着地をする、これが繰り返されるものですから初めてこの風速で出来上がるわけです。ところが木を植えてしまいますと、この風が止まってしまうわけですから、風紋が出来ることはない。風紋が出来ないどころか、砂の移動が止まってしまうので、片方で削り取られる砂がありますからどんどんと砂丘がなくなってしまう。砂が動かなくなりますとなにが起こるか、草が生え出すわけですね。草がええかちゅうほど生えるわけでございまして。それで大変な事になってしまうわけですね。考えてみたら昔も草が生えていたんです。実はこれ歴史は繰り返してしまっていて、砂丘っていうのはだいたい10万年から12万年の歴史があると言われてはいるんですけども、この砂丘が出来上がったから、新砂丘、古砂丘というような事ですね、中もあの、層があるんですね。層が分かれていますね。真中に茶色いこう砂があるんですけど、これは大山から飛んできた火山灰だとか、鹿児島ではアイラ火山の火山灰とかですね、そういったのがあるんです。それが、だいたい大山の火山灰があるのはだいたい5万年前なんです。ですから実は全国あちこちで見られまして、こういう大山の火山灰層がみられるところが、5万年前の地層だってことが分かるわけですね。そういうような事でございまして、新砂丘と古砂丘があるんですけども、そういう層の中にですね炭化物、有機物の炭化したものというような層もあるわけでありまして、だから草が生えていた時期もあるんですね。それが年を追ってそうではなくなっている。今度はそのまた砂丘が形成される時代だとかこういう事が繰り返されて10万年経って今の砂が出来たわけですね。

ですから、あの砂丘を取り戻すために、ボランティアが立ち上がったんですよ。という話を申し上げましたら、皆さん全国から来た人が大変びっくりされておりました。考えてみたらこの砂丘ですけども、草原化が進むにつれて、それをこう採っていくんですよ。この採っていくことは非常に世界的には珍しいと、今富山製鉄じゃありませんけれども、やればできるとか言ってですね、100万本木を植えると、内モンゴルの方まで出かけていきまして、みんなで木を植えると、実際100万本になったそうではありますが、大したもんでありますけれども、そうやって木を植える、砂漠があればそこに植えていくことは、当たり前なんですけれども、鳥取砂丘に限っては砂漠に戻すために草を抜くという事で、緑化に反対しているわけでありまして、こういうところは珍しいと、こういうところは珍しいという事に気がついたのはですね、それまでアラブの方に赴任していたニューヨークタイムズの記者さんがおましてね、この方が平成18年だかに鳥取の方に来られて取材してみるとどうもここは世界中と逆の事をやっている、世界中の環境保全活動はですね、緑化を推進しているのに、ここだけは緑化の反対側でみんなボランティアが朝早く出てきて草を抜いているとこういう事でございました。こういうようなボランティア活動が3000人程年間ですね、今おられる。ゴミを拾われる活動も合わせますと、だいたい延べ1万人ぐらいい超えるようになりました。ここ数年です。どんどん伸びているんですね。今年は鳥取県でも新しい鳥取砂丘の条例を創

りました。議員さんもおられてですね、緊張もしとるわけでございますけれども、日本一の鳥取砂丘を守り育てる条例というのを創りました。議会でも反対もありました。反対があった方がですね、落書きをすとかあるいはゴルフの打ちっぱなしを禁止するだとか、これは当たり前だと思うんですが、砂丘でゴルフの打ちっぱなしをする、こういう事を禁止するそういう規制的な部分も入っています。ですから、観光客の方によろこそいらっしゃいましたというのに、なんで罰金を30万とか取るような条例をだすだいやとこういうようなお話もございまして、それは至極ごもっともなんですけれども、私は私なりに確信はあったんです。これからは環境というのは、みんなで守ろうというのはむしろトレンドである、ですから砂丘の国という1つの国に来られた皆さんは、その国の掟に従ってください。ですから砂丘守る事に協力してください。むしろそういう風に呼びかける方が、観光の意味でも資源になると条例の存在自体が資源になるとこういうように考えました。議会での審議の真っ最中にですね、頼んだわけではないんですが、ヤフーっていうインターネットの会社がありまして、ここが勝手に全国アンケートをやってくれたんです。そうしたら、議会の議論は、伯仲しとったんですけれども、そのヤフーのアンケート結果でもですね、圧倒的多数の方が鳥取県は罰則をかけてでも落書を禁止してもいいと、こういう風に言ってくれたもんですから、それじゃあええでないかなとこういう事がありまして、議会の方もまとまってですね、可決をして頂いたとこういう事があります。それでこの4月から砂丘にはレンジャーがいます。レンジャーを設置するという事で、職員の皆さんと県庁の中で話し合いました。何人にしますか。という事でやっぱり5人だとゴレンジャーだと、でまあ5人いるんですけれども、1人辞められたりしたんですが、まあどうでもいいです。そうしたら、桃レンジャーいないのかとか、なんかいろいろわけの分からんお客さんもおられるんですね。それはともかくといたしまして、そのゴレンジャー部隊とかですね、住民の皆さんと一緒に砂丘の保全活動をやっている。

これは砂丘に限りません。例えば三朝でカジカガエルをですね、保全保護してそれを観光資源にしようとか、米子の方では街中でゴミ拾いをしてそれで綺麗な街にしていこうとか、そういう事が県内各地で行われているわけです。大山に至ってはですね、もともと一木一石というのがありましたけれども、キャリアダウンボランティアというのを創めたとこの話は全国みんなびっくりされますね。なんていったって大山の頂上にあるトイレの汚泥を持って降りるとい話でありますから、もともと汚泥をどうやって下すかヘリコプターで下ろそうかという事になりますと、いろいろと生態系に影響しますのでこれは問題だという事になったんですね。1トンの汚泥を持って降りるとそれは大変なことでありますので、県庁の職員で手分けしてっていうのもとても出来るもんじゃないと、だからボランティアを募集しようというような話になったんですね。2リットルのペットボトルに詰めますと、それを持っておりますと、そういう事でしたら、500人がいればできると、ボランティアを集めてみようじゃないかと始めたら、初めてほしい450人くらいよくしたもので、ご協力頂けて集

まってきました。お子さんなんかもおられるんですね。お子さんなんか正直ですから、親御さんがボランティアやろうと言って連れてきたんだと思いますけども、山頂の方にお子さんなんか来られまして、今からこれ持って降りるって言ったら、ええこれうんちじゃない。とか言って。その通りなんですけれども、それを持って下りるの嫌だっちゅう事ですけど、下りてくると皆さん清々しい顔してます。子どもたちもね、こうやって自然に対していい事をしたよっていう気持ちになって帰ってくれる。そういうようなのが今の時代だと思うんです。これが、鳥取が根付いてきました。お陰さまで粟嶋会長さんをはじめ皆さんがこうやって集まって頂けるぐらい、環境のネットワークが広がってきて、その力強さってというのが生まれてきました。私たちは今度はこれを次の地域づくりの起爆剤につなげていかなきゃいけない。その時期に差し掛かったと思います。

時あたかも、政治もいろいろ動いてきますし、国際社会も変わってきました。先般コペンハーゲンの方に世界の首脳が集まりました。それで、けんけんがくがくの議論をして2度ですね、温度の上昇を抑えるという事の重要性について認識をし合う。それからそこでこういった話し合った事につきましては、留意をするという決着になりました。正直、なにも決まらなかったに等しいかなと思うような感じもするんですけども、ただ大切なのは発展途上国もそれから先進国も含めて、1つのムーブメントが地球上で生まれてきたという事だと思うんです。今から約40年近く前、ローマに世界中の賢人が集まってローマクラブっていうのをやりました。ここで予言された事があります。すなわちこの地球っていうのが有限な存在であると、初めてですねその中で訴えかけたわけでありまして。その訴えかけの中に1つは食糧危機になるだろう、それから2つ目には資源が枯渇するだろう、それから3番目には環境が荒れ果ててしまって経済成長が止まってしまうだろう、人口も衰弱するだろうというような予言を立てたんです。今その通りになっているんですよ。40年前に話し合ったことの後、実は10年っていうのは愚かしい事に、そのまま追いかけてきている。同じ1972年にストックホルムにおきまして、国連の環境会議というのが開かれました。以来10年ごとにその大きな会議が開かれています。リオデジャネイロとですね、こないだはヨハネスブルグでやったりしました。京都議定書が結ばれました。それに基づいて今ですね、私たちの方も動いてきているとこういうことでもあります。不況という現象でCO2の削減を訴えかけた事、これは大きなインパクトがあったと思います。今実際もうすでに1990年が基準年でありまして2008年から2012年というレンジに入ってきていますから、結果をだしてこなきゃいけない状況だと思います。国全体の事で言いますと、若干上回るむしろCO2の排出量は増えているという状態になっています。

鳥取県も私就任した後、いろんな方々からご意見を頂きまして次世代改革プログラムというのを創りました。環境先進県むけての次世代プログラムというのを創りました。8%のCO2削減を基準値に対してやろうという事だったんです。実はこの度達成したんです。それは自然エネルギーだとかそれから森林のCO2吸収というものを噛み合わせますと、8%

強の削減にくるんですね。ただこれはあまりにも景気がこう悪くなってきましたんで、それでたまたま達成できたという事だと思います。国の方も昨年-6%強CO2が減っているという状態になっています。まだ基準値に対する目標では達成できていませんけども、去年はそういう年でありました。ただ鳥取もその年の影響もあるんですけども、今まずまずの線にはきてはいるわけです。ただまだまだやらなきゃいけない事がある。これを引き上げてきた鳥取の場合1つは福田さんの話もありましたが、自然エネルギーの事がですね非常に爆発的にこう増えてきています。マニフェスト段階で私が訴えかけたよりももっと多くの、自然エネルギーの発電量に今もうなってきました。特にですね嬉しいのはその太陽光発電など先程もご紹介頂きましたが、県の方で補助制度もこれ全国トップレベルの補助制度なんです。それを創ったこともありまして、非常にいまですね伸びてきている。太陽光発電だとかそういうものをいれまして、世帯当たりで割ってみますと、全国47都道府県ありますが、鳥取県は世帯あたりのこうした自然エネルギーの利用度は2番目に高いんですね。トップは青森県なんですけども、2番目が鳥取県です。最下位は東京都で、ざまあみろと思って、たまにはこうやって勝つこともないといけないと思うんですけども、そういうことでありまして、鳥取はそういう意味では環境先進県の今自負固めにはいったとそういう状況ではないかと思えます。そして、これから次のステップへという事ではありますが、今日のテーマでもありますが、環境かたらずして経済なしというようなテーマでやっておられます。これからはさらにそういうものを活力だとか幅広いくらしの中で体験できるようにしていかなければいけないと思います。そうゆうように切り替えていく、さらにギアをですね次の段階までチェンジをしていく事が大切になってくると思います。今鳥取県で考えておりますのは、グリーンニューディールのプロジェクトというのをやりました。

この春の段階なんですけども、いろんな方の御意見も聞きながら、これからグリーンニューディールとして鳥取県が取り組むべき課題を挙げて、整理をしていきました。1つは環境産業の隆盛を図っていくべきだという塊のことですね。それから私たちの暮らしを変えていこうという、そういうような領域、また町づくりだとかですね、そうしたいろんな事も含めて私たちは関わっていかなければならないだろう。そんな事を示させて頂きました。それをですね単に偽装だけで終わらせては私はいけないと思うんです。

ですから、お集りの皆さんと一緒に一歩一歩かもしれないですけども、そうした事を現実のものへと変えていかなければいけないだろうと思います。動き始めているものがいくつかございます。例えば環境関連産業というのがこれから大切になってくると思うんですね。正直申し上げて、日本の経済成長は頭打ちに入ってきています。しかも先進諸国の中でも唯一、株は下がるは経済は停滞するはという状況です。ただちょっと向こう側を見ますと、中国は8%成長とかですね、それからインドとかですね、ロシアとか、どんどんと新興国は伸びてきています。ものづくりでこれまでやってきたわけでありまして、単なるものづくりだけで日本は生き残る道はどうも無くなってきている、ですからこれからはですね、地球上

が関心を持って地球上が求めている技術開発、商品開発、商品製品製造というところに、私たちは生業を求められないだろうか。というのが1つだろうと思います。

そういう意味で例えばエコカーのプロジェクトをですね、発信始めさせました。つい昨日でございますけれども、県内の11の企業や団体が参加をして頂きまして、夢のような話ではありますが、電気自動車の開発プログラムに県内企業が一致して臨んでいく事になりました。昨日発足をしたわけでありまして。これは全国レベルの動きでございます、もともと慶応義塾大学の清水先生という先生が開発をしてきたものであります。この先生は慶応大学の中ではどうも変わり者と言われていたそうでございまして、30年でもありますね、ガソリン車全盛の時代でありますけれども、電気自動車ばかりやっていたと、それが今ここにきて急速にこう光が当たってきているわけですね。このプロジェクトには鳥取県も参加をしておりますし、岡山の福武書店さんベネッセ、それから中古自動車のガリバーさんとかですね、いすゞ自動車さん、鳥取県が参加すると言っていて、これが日本経済新聞にすっぱ抜かれてしまいましたら、あとから岡山県が追っかけてきていまして、岡山県今も参加をしているとそのような状態なんです。東京の方で発足式がございましてね、1月の末に発足式がありました。鳥取県からは商工労働部長が山根という商工労働部長が出席しましてオープニングをしたんです。記者会見をやりました。僕はこれは見ていないんですけど、ケーブルではでるらしいんですけども、ワールドビジネスサテライトっていう番組がニュース番組がありまして、テレビ東京系、テレビせとうち系ですかね、そのニュースで全国ニュースでですね、その鳥取県の商工労働部長のインタビューが出たわけでございます。どうしてこんな参画するんですかと言われて、これからの時代電気自動車の技術が大切だとかこういうものに県内の企業さんが部品を出したり、技術を得たりそういうよう事が必要なんで県としても参画しました。と、しっかりとテレビに向かって全国に向かってしゃべっていたんですけども、テロップには鳥根県商工労働部長と出ていました。

鳥根は鳥取の左側だと、でうちは右側だと、まあ、テレビ東京さんですからね、知らないかもしれませんが、とにかくそういうわけで全国デビューして、正直この点では我々もですね、トップランナーの辺りを走り始めたと思います。

出来ればそれに関連する企業を育てたり、あるいは立地を促したり、それも今本気でですね、向かおうとしています。これに限りません。例えばハイブリッドもそうでありますけれども、県内のいろんな電機産業だとかですね、そうしたことの下地が実は生きてくるんです。こういうような事で1つのエコカーという事がある、またLEDもそうですよね。LEDも実は他所技術っていうのが鳥取県内にあるんです。LEDの技術は何に近いかっていうと液晶に近いんですよ。液晶の技術っていうのはLEDと親和性があります。県内にはLEDの手前の液晶関係の会社さんや技術がございまして。ですからそういうものですね、転用されてくる素地は十分あるわけです。現実問題最近もですね、千代三洋さんという障害者の方が働いている工場があるんです。ジャスコの鳥取北店のあたりにあるんですけどもこの千代三洋さん

でLEDのセンサーが本格化してきました。ですからこれをですね、県庁なんかでも率先して買おうじゃないかというような事を始めようと今している真っ最中なんですけれども、そういうLEDもですね、これから変わってくる、先般も東京の企業さんが進出をしてくる、鳥取市の津ノ井に進出をしてくる事になりました。この企業さんはLEDのいろんな、ちょっと高級な奴ですね、企業向けのLEDでありますけれども、事業者向けのLEDをやるんですが、それを開発して、そして実際に生産をするのは鳥取県内の電気事業者さんにつくってもらおうとこういうことでもあります。ですから、こうやってLEDなんか1つの鳥取県としては、チャンスのある分野かなと思います。また太陽光発電など自然エネルギーの系統、これもですね鳥取県の伸びていく余地は十分あると思います。太陽光発電というどうしても日照不足だなという話はあるんですけども、ただそういうメガソーラー発電の事を本気で考えた方がいいですね。鳥取県内でも全く余地がないわけではない。これは専門の方に言うとおっしゃいます。ですから、むしろ土地代が高いところ、いろんな要素を考えた場合にこちらの方でもそういう展開の余地がないわけではない。また住宅用という事を考えますと先程申しましたように、全国でも指折りの太陽光発電をやるような県になったわけですね。これはいろんなところに実は波及してまして、電気工事をやる会社さんがございます。そういうこの会社さんがですね、よってこられてこそこそう教えてくださるのは、本当にいいと。増えてるんだそうですわ太陽光発電。県内企業さんは、県の補助金なんかもあるものですから、いろんなところで住宅用で普及し始めてるんですね。ですからそういう需要が出てきてまして、太陽光パネルの設置というので、結構ビジネスとして面白いかんじになってきているということでありました。そういうふうに自然エネルギー関係も波及がでてくると思います。

今県が研究しておりますのは、小水力発電をですね、これを研究しています。県に産業技術センターというところがありまして、その研究所で小さな小水力発電ですね、例えば鳥取県内いろんなところに水路があります。農業用だとかですねいろんな水路がある。そういうものを活用して電気に変えていくには結局中国山地から日本海までそんなに距離がありませんから、図面に書いてみれば急峻な流れっていうのはたくさんあるわけですね。それを上手に活用することで県内で発電を増やすことは出来ないだろうか。という話です。ただその機械が高いものですから、なるべく安くそういう発電ができる機械を開発できないだろうか。そこにライセンス生産のような形で県内企業がタイアップ出来ないだろうか。この辺を今模索しております。

現実に小水力発電の発電に関してはノミネートしてきておりまして、山間の中山間地域のところのですね、いろんな水路でやろうという話が出てきたり、また県でもっております賀祥ダムというのが西部の南部町のところがございます。賀祥ダムですね。賀祥ダムのところでその水路を活用しながら、小水力発電ができないだろうか、こんなような事もですね今検討しているところなんです。こんなような事でいろんな意味の自然エネルギーのですね、発

電ができる事になるんじゃないかなと、そうしますと今大変に増えてきております、風力発電なんかとも噛み合わせまして、スマートタウンというのを創ってみようじゃないかという話を始めております。実はこの度1月に県議会を臨時議会を招集しまして、そこでいろんな予算を出したんです。経済雇用対策中心なんですけども、その中の出した中の1つにですね、スマートタウンの研究の予算というのも通りました。街中型とかですね、それから企業連携型とかそういういろんな形態があると思うんです。スマートタウンっていうのは発電を片方でして、片方でももちろん使う電力を使う、これをICTよりはインターネットとか電信技術、通信技術なんかを活用しまして、それで1つのパートというかコミュニティーを考えようじゃないか。その中で電力を賄い、余れば売電をしていくそれを電力会社とのやり取りだけでなく、地域で拠点化してやれないだろうか、こういう構想であります。この研究プロジェクトは、これからスタートする事に1月の議会で承認頂いてなりました。だいたい7千万くらい予算があります。結構大きな研究が出来ると思うんですね。1つの典型例としては、町の中で住宅用などを中心としたエリアを創りまして、そこにスマートタウンを設置するとしたら、こんなものが出来るんじゃないですか。というアイデアがあるかなっていうのは1つ。また、企業さん大きな工場で、例えば天井に太陽光パネルでメガソーラーをやると、組み合わせることで工場の中の電力をまかなったり、そういうやり方も考えられないだろうか。いろんなパターンがあると思うので、そのへんを研究をしてそして、新年度以降ですね、それを実際にそういう方向に向かっていこうじゃないかという事を考えているところであります。また、水質だとかですね、環境の管理の問題もあります。例えば島根県と大橋川問題というのがございました。これはいろんな議論があり、皆さまにも様々なご意見があろうかと思えます。私はですね、島根県から年末に協議が来ましたときに、正直思いましたのは単に島根県に返すだけのお話ではないと、大橋川の着工に同意するかどうかという土木工事の問題ではないと、むしろ未来に向けて、未来の子どもたち孫たち、さっき福田さんのビデオに可愛いらしいお孫さんが出てきましたけれども、ああいう世代にですね、なにを残す事が出来るかと、そのために、今の私たちはそういう責任を果たす事が出来るか、その時に、島根県だ鳥取県だという事でなくて、協力してやっていくそういう答えをださなければいけないと思ったわけです。ですから、島根の溝口知事にはですね、最後の最後の段階で、米子や境港の御意見も踏まえて、大見崎堤防の切り取る開削をする可能性も視野に入れて、これから検討するんだという事をのんでもらいながらですね、両県一緒になって、国の機関も巻き込んで、住民の皆さんもいれながら、環境管理をやっていく体制を創っていかう、正しい次の時代へ踏み出そうという事に今やっとうようになってきたと思います。このような水質の問題はここに限らずですね、湖山池でも大変にご迷惑をお掛け致しているわけですので、せつかくですね、漁業支援もある中で、どうしてそこがという事があります。これ非常に厄介な問題で農業者の問題だとか、漁業者の問題だとか、もちろん生活の問題だとかいろんなものが絡み合って、難しい課題ではありますけれども、とにかく1つ1つでも進めてい

かなければならないと思います。例えば私どもの方で予算をとって今やろうとしているのは、これは霞ヶ浦とかでも始めているんですけども、大きな水系に出ていく手前のところに、小さなビオトープを作ってしまうと、ここである程度浄化をしながら水を下に流していくと、いろんなものが、閉鎖域には負荷を与えるんですね。それは決して生活産廃だけでなく、農業系だとか、あるいは正直言うと自然系が結構多いです。東郷湖なんかもそうなんですけども、自然系の負荷が結構掛かかります。そういうのを考えますと、やっぱりビオトープで制御をしていくっていう事をですね、考えてみたらどうだろうか。実験的なものでありますけども、やってみようじゃないかというような話をしたり、それから職員がですね、動く県庁話す県庁というスローガンをたてているわけでありまして、若手の県東部の職員が、住民の皆さんと一緒に綺麗にしていこう、そのために対策をたてようという事でプロジェクトをつくってましてですね、やったり致しております。こういうような課題はあらゆるところにあります。その自然系は特に住民の皆さまの御協力がなければ、できない事が非常に多いものですから、是非とも皆さんでも盛り上げて頂ければありがたいと思います。さらに景観の観点も大切だと思います。これも最近熱心に取り組まれ始めたのは、県内あちこちにあります。特に琴浦町のミツというところですね、非常に特徴的なものがあるんですがなまこ壁、鍍絵というものであります。なまこ壁っていうのはもともとは石州瓦なんかをベースにしまして、瓦と漆喰で留めまして、格子状にしたり、美しく飾っていく、壁を飾っていくそういう技法でありますけども、鳥取県内では左官さんの考え方があったわけでありまして、むしろ瓦を使わずに漆喰で作っていくという、自由な造形ができるなまこ壁も登場しているわけでありまして、ですから、非常にですね全国的にみても、面白いところだと、この環境ネットワークの皆さんも、この点で立ち上がって頂いて、こういうなまこ壁だとか、鍍絵っていうものを世の中に問うていきたいという動きになってきました。新年度は鳥取県も是非とも協力をさせて頂き、一躍担わせて頂き、なまこ壁関係のサミットといいますか、全国シンポジウムというのを展開していきたいというふうに考えております。景観問題だとかいろんな事ですね、探求する事はいろいろとあると思うんです。鳥取市の方で最近話題になっているのは武家屋敷の問題があるわけでありまして、これは我々はですね、新年度はこういう事をしようと思っているんですが、市町村がそういうのにタッチしてくるのであれば、県としてもそういう景観保全のための取り組みにたいして、大幅な助成をしていこうじゃないかと、こういう補助メニューを考えたいと思っています。ですから、地元でもですね地域で考えて頂き、そこにNPOだとか住民団体も関わって頂いて、町並みの問題我々の大切なふるさとをどういうふうに守り育てていくか、そしてこれは全国の人の樹木を集めたりですね、そういう事になってくるのだと思います。

今確かに大交流時代がやってきました。現実には3月の末になりますと、鳥取自動車道が開通をする事になります。それから海の向こうからはですね、ロシアだとか韓国から貨客船もくるようになってきております。現実にはロシアの観光会社が夢みなとタワーの中に営業所を

設けて、ツアーの誘客をしています。先般もですね、柔道の御一行さんが来られまして、4、50人ぐらいこられました。ある銀行さんがですね、びっくりしてお話をしてくれましたんですけども、この間その両替をやっていたらものすごい体格の外国の人がグループを変えていったと、間違いなく柔道家の人だなと思ったんですけども、そういうようにですね、いろんな方がですね、日本にやってくるようになります。そういう人たちが本当に口をそろえて言うのは、綺麗なところですね、って言うんです。韓国のアジアナ航空が今やってきています。そのアジアナ航空の重役さんがですね、女性の方なんですけども、米子空港からずっと米子の町の方に車で向かわれるときに、スタッフに話されたそうです。なんと綺麗なところかと、確かに白砂青松の松原もありますし、なにより皆さんがびっくりされるのは、町中にゴミ1つ落ちていないっていうのですね、このへんはやっぱり我々のコミュニティーがしっかりしているし、そして、誇るべき事なんだと思います。さらにそれをもう一歩進めて、環境ネットワークのお力で万人が環境先進県ですね、素晴らしい環境のあるところ鳥取県っていいところですね、住んでみたいところですね、こういうふうに言って頂けるように、していきたいと思います。

今日は本当に貴重なお時間を頂きました。環境ネットワークの皆さんのお力を得ながら、またこれからますます鳥取県の環境先進県づくり、頑張ってまいりたいと思います。皆さまのそれぞれの活動がなお盛んになる事をお祈り申し上げますとともに、皆さまのここきての御健勝をお祈り申しあげまして、私からのコメントに代えさせていただきます。本日は本当にどうもありがとうございました。